

仲間に入れて

笠利町立屋仁小学校 六年 朝野 哲平

ここは、太平洋上に浮かぶ小さな島、名前はアマネシア島と言います。

島の周囲は約四十キロメートル、サンゴ礁に囲まれた細長いひょうたんのような形をしているため、ひょうたん島ともよばれています。もちろん人間は住んでいません。

島の南側には高い山があり、シイの木やイジュなどの大木がしげり、うつそうとした森になっていて、北側は草が生えた平地でそのまま砂浜になって海に続いています。

中心部は大きな広場になっており、広場の真ん中を小さな川が流れています。そして、川のそばには一本の大きなガジュマルの木があります。そのガジュマルの木は、今にも天にとどきそうな勢いで高く伸び、何百人もの人が雨宿りできるくらい枝を広げていました。

ここは、島に住む生き物たちにとっては最高の遊び場であり、毎日のように島中の生き物たちが集まっては、一日中楽しく遊んでいます。

ここに住んでいる生き物たちは、それぞれが島中の好きな場所に家を作って住んでいます。そして、この大きなガジュマルの木の枝にも、ある生き物が住んでいたのです。

ぼくは、アマネシア島の主と言われている金ハブ、みんな

からは、「ハブネーク」と呼ばれとってもこわがらされていた。

本当は、ぼくもみんなと一緒に遊びたいのに、みんなはぼくの姿が見えると、こわがってにげてしまっただ。だから、生まれてから一度もお友だちをつくって遊んだことがないし、友達をお家に招待したこともありません。

今日も、木の上でとぐるを巻いてくつろいでいたら、広場から楽しそうな笑い声が聞こえてきました。

「いち、にい、さん、しい……。」

「マーガンくん、見つけた。」

下をのぞいてみると、森の中に住んでいるアカシヨウビンのクツカルくん和小川に住んでいるマーガンくん、北側の平地から遊びに来たヤギヤギくんがかくれんぼをして遊んでいるのでした。

「いいなあ。楽しそうだなあ。ぼくも遊びたいなあ。」

ハブネークは、たまらなくって、木からスルスルと下りてくると、「ぼくも仲間に入れてよ。」と言いました。

その声におどろいたクツカルくんとマーガンくん、ヤギヤギくんは、一目さんににげていってしまいました。

「何で、みんなにげるんだらう。ぼくは遊びたいだけなの。」

ハブネークは、何でみんなが自分をこわがるかわかりません。しかし、みんながハブネークをこわがるのには、大きな

理由がありました。

ハブネークには、長い牙が二本生えています。その牙にはとつてもこわい毒が入っていて、牙がささると毒が出てくるのです。ハブネークはとつても気が弱く、いつも何かにおびえたようにびくびくしながら過ごしていたのです。そして、おどろくといつの間にか相手にとびかかり、かみつくようになっていました。

それは、十年前の夏の出来事でした。今日は、となりの島からヤマシギのシギちゃんとカラスのカー子ちゃんも遊びに来ていました。いつものようにみんなと楽しくかくれんぼをして遊んでいたときです。

「シギちゃん、見つけた。」

ハブネークがシギちゃんに近づいたとき、森の中から大きなイノシシが飛び出してきました。びっくりしたハブネークはシギちゃんにかみついていたのでした。一しゅんの出来事だったので、みんなどうすることもできませんでした。

それからというもの、ハブネークはいつでもみんなと遊べるように、生えてきた牙を抜いていたのです。そして、木の上からみんなが楽しそうに遊んでいるのをながめているのでした。

そんなある日のことです。ガジュマルの木の下でマングーラのマングルくんが、食べ物を探して山から下りてきた黒ウサギのウサちゃんをいじめているのが見えました。

マングルくんは、いつどこから来たのかだれもわかりません。いつの間にか島に住み着き、気がついたときには島で一番のわんぱく者になっていました。そのいたずらには、みんなとつても困っていたところでした。

マングルは、今にもウサちゃんにかみつきそうな勢いです。「たすけてー。」

ウサちゃんは今にも泣き出しそうな声で叫びました。

ハブネークはウサちゃんの叫び声にびっくりしたしゅん間、大きな口を開け木の上からマングルめがけて飛び降りました。

マングルは、急に木の上から大きなハブが落ちてきたので、おっかなびっくり、一目さんににげていきました。

「もう大丈夫だからね。」

ハブネークは、草むらでブルブルふるえているウサちゃんに近づいていきながらこう言いました。

「ぼくはね、いつも一人ぼっちなんだ。いつも、みんなと遊びたいと思っているんだよ。だからこうやって生えてくる牙をぬいているんだよ。だからこわくないんだよ。」

ウサちゃんは、あのこわいハブネークが私を助けてくれたんだ、と思いました。近づいていく勇氣もなく、後ずさりしながら、

「ハブネークさん、たすけてくれてありがとう。」

と言うと、そのままにげてしまいました。

「ああ、やっぱりぼくは一人ぼっちなんだ。今度こそ友だちになれると思ったのに。」

ハブネークは、また木の上で一人で過ごすのかと思うと悲しくなりました。

そのころ、山奥の住みかに帰ってきた黒ウサギのウサちゃん、みんなを集めて、今日あったことを一部始終話しました。

でも、みんなには、あのおそろしいハブネークが助けくれたことやみんなと遊びたいために牙を抜いていることが信じられませんでした。

そこで、ハブネークくんのところに行つて確かめようということになりましたが、みんなこわいのでだれ一人行く勇氣はありません。

「よし、ぼくが行つて確かめてくるよ。」

森で一番勇氣のあるヤギヤギくんはそう言つと、さつと走つていきました。

「ハブネークくん、いるかい。」

ヤギヤギくんは、大きなガジュマルの木の下からハブネークを呼び、黒ウサギのウサちゃんから聞いたことを話しました。

「ぼくも、みんなと一緒に遊びたいんだ。だからこうやって

牙をぬいているんだよ。」

そう言つとハブネークは、するとガジュマルの木から降りてきて、大きな口を開けて見せました。ヤギヤギくんはお

そるおそるハブネークに近づき、口の中をのぞいてみたところ、あの長い牙はありませんでした。

それから、金ハブのハブネークも島中の生き物たちと一緒になつて大きなガジュマルの木の下で楽しく遊ぶようになったのでした。

そして、数年がたったある日のことです。

ハブネークは、自分の体に異常を感じていました。それは、ぬいたはずの牙が、すぐ生えてくるのです。

今では、ぬいても二十四時間以内に元の長さまで伸びるようになっていきます。

「これじゃあ、またみんなにきらわれる。もう、一人ぼっちはいやだな。」

そう思うとハブネークは、みんながよんでも木の上から降りてこなくなりました。

島の生き物たちは、ハブネークが病気になったのではないかと心配でたまりません。そして毎日、ガジュマルの木の下に集まり、一日中木の上をながめていました。

それを見ていたハブネークは、今日こそみんなに本当のことを言おう、と決心し、スルスルと木を降りてきました。

「ぼく、もうみんなと遊べないんだ……。」

と、牙を抜いてもすぐ生えてくること、生えた牙がすぐ元の長さまで伸びること、そして、おどろいたときにだれかをきずつけるかもしれないことを全部話したのでした。

みんなも話し合いました。そして、ハブネークと遊ぶときのルールを作りました。

ひとつ、ハブネークに急に近づいたりして、びっくりさせないこと。

ふたつ、ハブネークがいるかもしれない草むらや木の上、穴の中などみんなが気をつけること。

「さあ、今日からこのルールをみんなが守るんだ。そして、みんなが仲良く遊ぼうよ。だって、みんな仲間なんだから。」